

解

説

『美術新報』とその時代

明治十三年四月に、高橋由一、源吉父子によって刊行された『臥遊席珍』は、その年の八月まで、五号を発行したのみで廃刊になっているが、これは、わが国最初の美術雑誌ということになっている。そして、それから二十年ほど後の明治三十年代は、おそらく、わが国美術雑誌の全盛時代と言っているほど、多種多様の美術雑誌が刊行された時代であった。

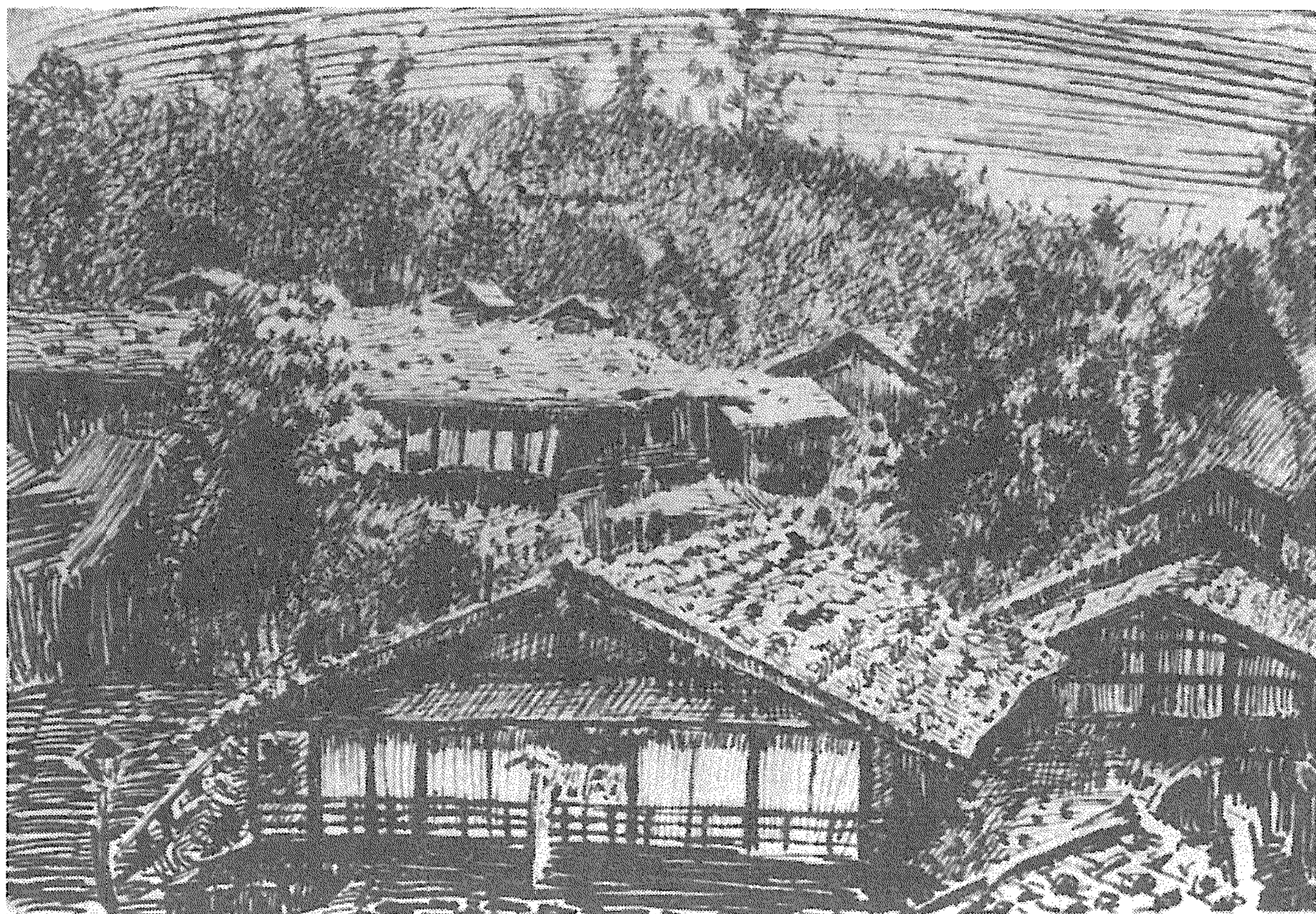
先ず、三十年には、『美術評論』（三十三年に二十五号を刊行して廃刊）、三十一年には『日本美術』、三十二年には『美術』、そして、三十五年には『美術新報』、三十六年には『美術文庫』と『精華』、三十八年には白馬会の機関誌『光風』及び『月刊スケッチ』、『L S』、『平日』、『みづゑ』などが刊行され、それも、年を追って活発になっていく。中でも三十八年七月に、大下藤次郎によって創刊された『みづゑ』は、最初、水彩画の普及を目的とした技術指導の雑誌として出発しているが、時により編集方針の変更はあったが、後には、洋画の専門美術雑誌として、今日まで七十数年の間、連続と刊行を続けていることは、わが国美術ジャーナリズムの歴史の上で驚嘆に値する事実であろう。

ところで、ここで問題になる『美術新報』（画報社、後に東西美術出版社）は、明治三十五年創刊、大正九年までに三百号を刊行しているが、『みづゑ』に比べて、はるかにおよばざるとはいえ、『美術新報』の前身たる『美術画報』（二十七年創刊）『美術評論』（三十年創刊）などの刊行年数を加えて考えると、先に掲げた三十年代の美術雑誌が、ことごとく、数年を出でず廃刊になっているのに比べると、美術雑誌としては、かなり長期にわたる活動期を持っていた、と言つてよいであろう。

画報社の創立は、同社が最初に手がけた美術雑誌『美術画報』の第一号が刊行された明治二十七年を遡ることそう遠いことではあるまい。あるいは、この『美術画報』の創刊をもって、画報社設立の年と考えてよいのではないだろうか。というのは、社名と雑誌名に「画報」という文字を共通に使用していることからくる、私の推測である。

経営者（あるいは後援者と言うべきかも知れないが）は、山東直砥である。山東は、星野錫（社長）と協力して、画報社を設立、大正七年に至るほぼ二十四年間に、先にあげた『美術画報』『美術評論』『美術新報』の三美術雑誌を刊行、大正二年には、さらに、報道性の強い『美術週報』をも刊行するにいたっているが、それら美術雑誌の刊行と平行して行われた各種単行本の出版も、なかなか活発で、見るべきものも少なくない。『美術新報』第二巻十五号（明治三十六年十月二十日号）は、『美術の栞』と題する臨時増刊になっている。本誌と同型のタブロイド判だが、わずか六頁に、記事二頁（おそらく編集者が書いたと思われる、間に合わせ的な記事）、一般広告二頁、そして、誌面の半ばを占める三頁を使って画報社の刊行物を、びっしり掲載している。おそらく、出版目録の配布を目的にした臨時増刊であったと想像される（ただし、定価が本誌の五銭に対し二銭とついている）。

この出版目録によると、当時の画報社の刊行物というのは、彩色木版やその頃急速に普及しだしたコロタイプ写真版による、画譜、画帖、模様図案集、展覧会図録、作品集、といったものが大部分であるが、中で注目に値するのは、森林太郎（鷗外）、久米桂一郎共著『芸用解剖学』、森林太郎、久米桂一郎、岩村透合撰『洋画手引草』、坂井義三郎著『画聖ラファエル』、芋洗著湯浅一郎画『巴里美術学生』の四冊がある。このうち、後の二冊は、『美術新報』の創刊された明治三十五年刊行されているが、前の二冊は、それより早く、『洋画手引草』は、明治三十一年の出版である。ここで、共著者の一人とし



岩村 透（左）と自筆スケッチ——信州猿渡温泉風景（右）

《絵画、解剖学、遠近法、美術学及美術史》を修め、かたわら《英文学及仏語学、伊太利語学を学ぶ》と年譜に記されているが、修学の最終目的は、岩村にも、まだ決断に至っていなかったのではないかと、想像される。というのも、岩村は、明治二十三年、同校美術科の全科を修業、卒業証書を受けながら、九月には、ニューヨークに移って、ナショナル・アカデミー・オブ・デザイン付属の美術学校で、さらに、絵画の技術指導を受け、再び、遠近法、解剖学、など実技の修学をしているからである。

明治二十四年九月、岩村は、《美術及美術史研究の目的をもって歐洲に渡航》しているが、彼は、ロンドン、アントワープ、ブリュッセルを歴訪し、最後に、パリに到着した（十二月）が、アカデミー・ジュリアンに入学、アドルフ・ブグロオ、ガブリエル・フェリエーについて画技を学びはじめている。岩村が、渡米後早い時期から、画家になる志を抱きはじめていたことは、想像出来るが、その決断は、ヨーロッパに渡ってから、容易につけ難かったようである。帰国後出版された『巴里美術学生』は、この時の、アカデミー・ジュリアンの生活がテーマになっていることは、言うまでもない。パリ滞在中に、岩村は、当然のことながら、ルーヴル、ギメー、トロカデロ、など有名美術館を再三訪れているが、そこで親しく観た古美術品は、以後の岩村の進路を、何か示唆するところがなかったであろうか。

翌年六月パリを発って、約四カ月にわたるイタリア旅行に出るが、十月再びパリに帰り、十一月には、マルセイユから船で帰国の途についている。この岩村の第一回海外遊学で、特に記録しておかなければならないのは、パリ滞在中に、岩村が、黒田清輝、久米桂一郎、を知ることになったことである。この二人の知己を得たことは、帰国後の岩村の進路を、ある程度決定するほどの重要なことであった、と言ってよいであろう。

岩村は、明治二十五年（一八九二年）十二月、五年ぶりに日本に帰

複製版解題

第一分冊

第一卷第一号(明治三十五年三月三十日)より第二十四号(三十六年三月五日)まで、

第二卷第一号(三十六年三月二十日)より第二十五号(三十七年三月五日)まで、これには、臨時増刊(第二卷第十五号、三十六年十月二十日)を含んでいる。

第三卷第一号(三十七年三月二十日)より第二十四号(三十八年三月五日)まで、七十三号を合本にした。

『美術新報』が、小原大衛の案で、タブロイド判八頁、月二回発行、定価一部五銭で出発したことは、すでに書いたが、雑誌というより半月刊の新聞と言っているようなこのスタイルは、報道性を重んじたことと、一部五銭という、何よりも定価が安いということが、成功の理由であった。同じ画報社から、そのころ刊行されていた『美術画報』が、並製二十五銭、上製(鳥の子紙刷)五十銭と比べると、『美術新報』が、当時の美術雑誌としては、如何に安価であったかわかる。しかも、当時の美術雑誌が、『国華』や右の『美術画報』のように、図版を主にした。いわゆる見る美術雑誌であったのに対して、『美術新報』が、最初から、美術界の報道や評論を主目的とした、《読む美術雑誌》であったことも、目新しく、当時の美術界の現状にもかかっていて、ということも、この雑誌の成功の理由の一端ではあったであろう。

以下、複製版の各分冊毎に解題を試みるわけであるが、何分、十九年間三百号という膨大な頁数だけに、あまり詳細にわたることは出来ないが、今日から見て、美術史的に興味深く、貴重と思われる内容を取り上げて、若干の解説を試みたいと思う。

初代の編集主幹は、言うまでもなく小原大衛であるが、その背後に、顧問格として、岩村透、黒田清輝、久米桂一郎、などがあつたことは知られているが、当時は、まだ文展の設立も見ない時で、彼等も、単なる、明治美術会の新派と見られていた程度であつたから、『美術新報』が、アカデミズム一派の色彩を帯びた機関誌的な雑誌であつたと見るのは、早計であろう。

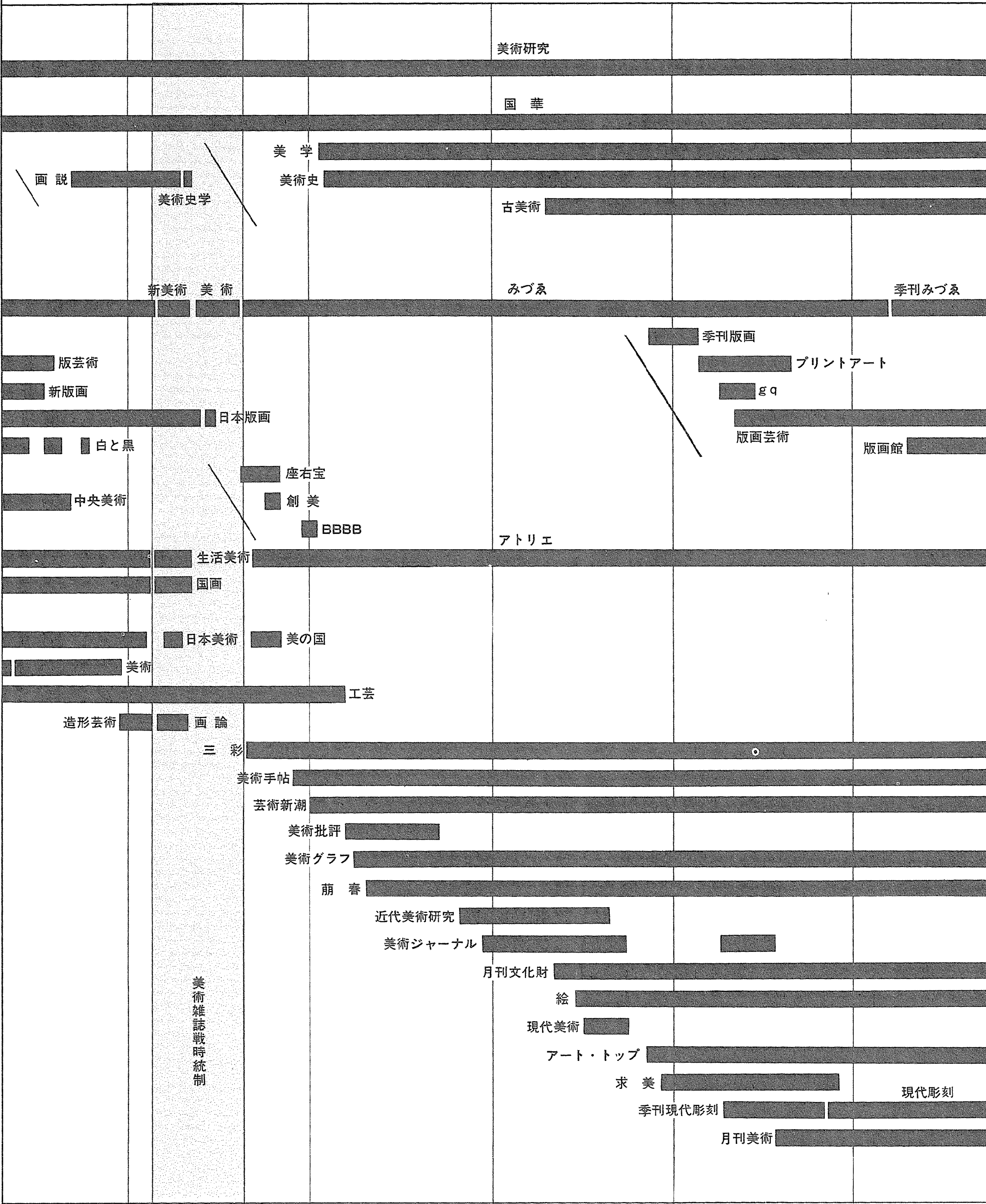
創刊の当初(ある一時期をのぞいて、全巻を通じてと言っても間違いにはならない)、当然のことながら、執筆陣の主力となつたのは岩村透であつた。ちなみに、第一卷第一号の岩村の執筆を見てみると、先ず、「欧洲中世芸術史談」の連載が始まっているが、その他に、無記名ながら、岩村の訳文に間違いのない「羅氏美術講義」(ジョン・ラスキンのオックスフォード大学に於ける講演の一部)の連載も始まっている。また、芋洗の号を用いた「反声雑記」というコラムも、毎号の連載である。わずか八頁の雑誌に、三本の連載を、岩村自身が担当している。ということは、岩村が、如何にこの雑誌の創刊に期待し、力を入れていたかわかるのである。創刊から約二年間、岩村は、同誌の執筆者として、実に、情熱的に活動した。(創刊当初の岩村の執筆論文訳文については、すでに書いた)。

第一号で、特に注目すべき記事は、山本芳翠の「洋画研究経歴談」という洋画修業の回想談で、これは、本人直接の談話筆記だけに、わが国の初期洋画移植期の史料として極めて興味深く、貴重な記録である。余談になるが、『美術新報』を通覧していて、気付いたことだが、本人の直接執筆でなく、記者の手による談話筆記が非常に多いことである。一般に、芸術家で文章を書くことが得手という人は極めて珍しく、そういう人たちの貴重な意見や経験談を聞き出し文章にすることは、今日でも多く見られるのであるが、美術雑誌が未だ普及しなかつた当初は、編集者の最も苦心する事であつたに違いないことは、充分想像がつく。『美術新報』の記者たちは、この手段を、毎号実にまめ

	美術史年表	画報社・『美術新報』関係年表
明治27年 一八九四	日清戦争始まり、浅井忠、山本芳翠、小山正太郎、黒田清輝、ビゴーら従軍す(8月) 第六回明治美術会展に、黒田清輝、久米桂一郎滞欧作出品さる(10月) 黒田清輝、久米桂一郎は生巧館画塾を譲り受け天真道場を開く(10月) 高橋由一没六十六歳(12月)	『日本美術画報』創刊(後に『美術画報』)
明治28年 一八九五	第四回内国勸業博覧会が京都に開かれ、出品された黒田清輝の『朝妝』が裸体画問題を引き起す(4月) 洋画の新旧論争起る。	
明治29年 一八九六	黒田清輝、久米桂一郎ら白馬会を起す(6月) 東京美術学校に洋画科開設され、黒田清輝、久米桂一郎、藤島武二、岡田三郎助ら教授となる(7月) 第一回日本絵画協会展(9月) 白馬会第一回展(10月) 紫派、脂派(新派、旧派)の対立激化、森鷗外、高山樗牛論争す。	
明治30年 一八九七	古社寺保存法発布(6月) 第二回白馬会展、黒田清輝『湖畔』を出品(10月) 岡田三郎助、文部省留学生として渡仏、ラファエル・コランの門に入る(10月) 中村不折、島崎藤村の『若菜集』に挿絵を描く。	『美術評論』創刊(11月)大村西崖編集、森鷗外、久米桂一郎などが毎号執筆した。 《内容体裁ともに当時の美術雑誌としては頗る高踏的なものとなつた。その標榜する所は自然主義、写実主義で、最初は岡倉天心もこれに執筆したが、後には天心一派の理想主義者を目の敵にして盛んに攻撃の矢を放つやうになつた。》(清見陸郎著『岩村透と近代美術』)
明治31年 一八九八	岡倉天心、東京美術学校を辞任す(3月) 橋本雅邦、岡倉天心らと日本美術院を創立(7月)	画報社より、『洋画手引草』(鷗外・森林太郎、久米桂一郎、岩村透、大村西崖、合撰)出版さる(12月)

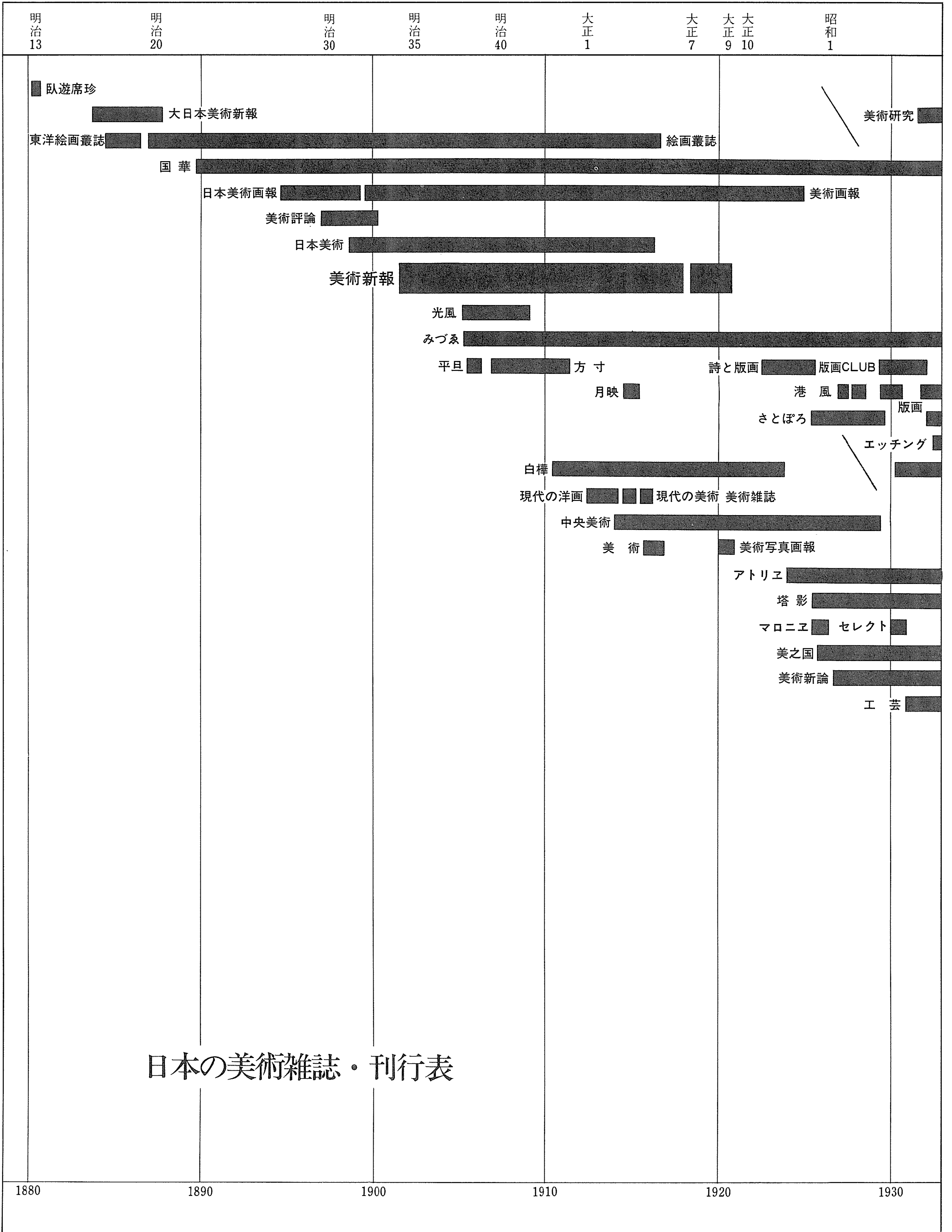
日本の美術雑誌・刊行表

昭和 10 昭和 20 昭和 30 昭和 40 昭和 50 昭和 60



1940 1950 1960 1970 1980

美術雑誌戦時統制



日本の美術雑誌・刊行表